

根岸派と洒落ル会

中込, 重明 / ナカゴミ, シゲアキ / NAKAGOMI, Shigeaki

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

63

(開始ページ / Start Page)

38

(終了ページ / End Page)

44

(発行年 / Year)

2001-03-24

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00020147>

根岸派と洒落ル会

塩田賛は『露伴と遊び』（創樹社・昭和四十七年）の自序でこう書いている。

根岸党研究の資料はおよそここで尽きるに近かろう。しかし、絶対にはいとはいつまでたっても言うことができない。いちばん出そうな資料はおそらく会員たちの書簡ではあるまいか

塩田は前著の「結び」でも、まるで駄目押しするかのよう、「根岸党の記事が残されてるのはここに扱ったぐらいではないかと思う」と書いている。「ここに」とは、当然にして『露伴と遊び』所収「根岸党記事」を指している。実際、塩田の予想通り、森田思軒の手紙類が、前著刊行後に翻刻紹介された（富岡尊之「森田思軒関係書簡」・昭和五十三年十月『岡山県立博物館研究報告』第一号）。このような塩田の自信と見通しを前にしては、これから出し論じる資料を、どこまで重要視していいものか。あるいは、塩田の見聞に入っていたにもかかわらず、瑣末な日

中 込 重 明

常の催しと判断し省いたと考えられなくもない。仮にそうだとしても、今日から見れば、これは紹介に値する資料であり、少なくとも、これは「根岸党記事」からは窺い知れない根岸派の人々も参加した出来事であることには違いない。尚、本稿では根岸党ではなく通行されている根岸派と表記する。^{註1}

○

おそらく関係者だけに配布した案内状であろう「諸君洒落ル会」とはじめに認められた刷物がある。鬼子母神の提灯と錨の絵馬を右上に書き入れ、左上には南無妙法蓮華經の万燈を描き込んでいる。「諸君洒落ル会」の後には、「明治廿六年十一月十二日午后一時」。改行されて「下谷入谷町真源寺本堂に於て開会」とある。鶯亭金升の日記『むだ雅記』（早稲田大学演劇博物館所蔵）廿三集の明治二十六年十月二十四日の箇所に、「洒落会」とあって、その下に会主である伊東専三の印が捺され「鶯亭金升

様」と宛名のある封筒が貼り付けてあるので、右の頃関係者に郵送されたのであろう。続けて「兼題」とあって、「恐れ入谷の鬼子母神」・「どうで有馬の水天宮」・「しゃれの内のお祖師様」とあり、さらにこう続く。

右の三種を御随意にしゃれ当日御持参被下度すぐに披講秀逸の部ハ額面に記載し真源寺鬼子母神宝前に掲げて尽未来際まで洒落レものたるを伝ふ。

つまり、明治廿六年十一月十二日午後一時、下谷の真源寺(鬼子母神)の本堂で諸君洒落ル会が開会されるので、それまでに兼題にあつた洒落を考えて来て提出。そこで優秀作を決め宝前に掲げるといふ連絡である。この洒落の審査をする者の名も事前にこの紙には記されており、それが「しゃれ判者」で、「幸堂得知」、「落合芳幾」、「南新二」の三名。そして「当日席上余興」が記され、「当世洒落娘 柳家枝太郎」、「舶来洒落手品 春天斎 柳一」、「三題洒落語 柳亭燕枝」とあって、「会費御一名金五拾錢美酒佳肴を呈す」とある。

さらに、「賛成者」・「幹事」が以下のように列記されている。「寺家村逸雅」・「條野採菊」・「森田思軒」・「黒岩涙香」・「野崎左文」・「饗庭篁村」・「右田寅彦」・「鈴木芋兵衛」・「榎本破笠」・「骨皮道人」・「片山友彦」・「谷田部落葉」・「武田仰天子」・「岡本狂綺堂」・「篤尊金升」とあって、続いて幹事が「若菜貞爾」・「大澤基輔」・「廣岡柳香」・「関根只好」・「江澤梅逸」・「談洲楼燕枝」・「山下晴雨」とある。最後に「会主」とし

て「伊東専三 居 深川御藏前町四十八番地」。尚、この会の開催を予告する記事が、明治二十六年十月二十七日の『朝日新聞』にあり。

これらの人物を「しゃれ判者」から一人づつ見てゆこう。幸堂得知は戯作者であるが、研究者としての横顔を持ち、帝国文庫・近世文芸叢書・新群書類従の校訂者として知られる。この頃は「歌舞伎新報」の編集者として奮迅した根岸派の文人の一人。吉田香雨「当世作者評判記」(明治二十四年)には、「得知君の滑稽は実に天下一品なり幸堂ぬしの諧謔は実に当世絶無なり」と絶賛され、しゃれ判者を司るには、まずは適任。落合芳幾は歌川国芳門下の浮世絵師・一恵斎芳幾、歌川芳幾だが、錦絵新聞で名を売り、主筆的立場の『歌舞伎新報』紙上では落合の姓で筆を持った。明治五年の創立の『東京朝日』の幹部で、錦絵新聞や『東京絵入新聞』に関わる。後述の條野採菊とは江戸時代から粹興連などで行動を共にした仲。仮名垣魯文編『駄洒落早指南』(文久二年刊)には、採菊(当時・有人)とともに洒落を載せている。一つ引けば、「妹背山のをだまき いなせあまのぐだまき」(早稲田大学図書館所蔵本)。採菊が自宅で創刊した新聞の後援者でもあった。南新二も根岸派の文人で代表作に『軽妙集』(明治四十年)があり、この頃『やまと新聞』に作品を多く掲載し、『片目鰻』や短編集『文車』を出している。『当世作者評判記』には、南新二を有名な通人とふまえた上で「其

洒落は古風なり」・「その滑稽は時代なり」と記す。得知同様に判者にはふさわしい評価。次に余興と呼ばれた芸人だが、柳家枝太郎は、この会の後すぐ（明治二十六年十二月）四代目柳亭左楽を襲名。持ちネタは少ないが俗に「オットセイ」と呼ばれ人気を博した逸話多き芸人。春天斎柳一は四代目麗々亭柳橋門下の奇術師。柳亭燕枝とは後述の談洲楼燕枝と同一人物で、後世の知名度には格段の差があるが、当時の名声と存在感は三遊亭円朝と双壁。

賛成者に移って、寺家村逸雅は『有喜世新聞』の社長。江見水陰はその風体を「江戸の大通を以て気取って居った。頭の禿げた。藐睨みの。小造りの。老人」（『自己中心明治文壇史』）と書き残している。また、前著によれば洒落会の翌年（明治二十七年）水陰を呼び出し新聞連載の小説の内容変更を迫られた時、その逸雅の左右に後述する仰天子と金升がいたという。條野採菊は後の毎日新聞の祖となった『やまと新聞』の創立者であり、幕末から明治にかけて活躍した戯作者で、別名・山々亭有人。三遊亭円朝の絶大なる協力者であり今日の円朝の名声もこの人の尽力に因るところが多い。この頃、明治初期に休めていた創作を翻案物で再開させており、明治二十六年はシェイクスピア『オセロー』の日本化である『疱瘡伝七郎』を著している。^{注2}森田思軒は翻訳者として其名を後世に馳し、この頃はユゴーの翻訳を行っている。また、言語学の論文も物すなど多才であり、これも根岸派の一人。黒岩涙香は翻訳家・探偵小説家として余りに著名なため多くは書かないが、この二十六年においては、『鉄仮面』・『白髪鬼』を翻訳（翻案）するも、相馬事件を自分が携

わる『万朝報』に取り上げたために、発行停止の憂き目にあった。野崎左文は仮名垣魯文門下で、『いろは新聞』・『有喜世新聞』の記者。その著作『私が見た明治文壇』（昭和二年）が著名。この会の頃は、『全国鉄道名所案内』（明治二十五年）などの出版物に関与。饗庭篁村は根岸派の代表的存在であって、明治の戯作者であり記者。『むら竹』（明治二十二年）に収められた小説には滑稽なものが多い。また、江戸文学の造詣が深く、この年はちょうど近松の評釈や八犬伝の評答集の仕事を終えている。ポーやディケンズの翻訳の仕事も知人の助力を頼ってこなす一方、江戸風の作品を残しつつも、近代的な作品も少なくなっている。これが『当世作者評判記』に、篁村は八文字屋流の文体を捨て、若隠居したと歎かれる原因にもなったか。暉峻康隆「饗庭篁村論」（小学館『近代日本明治文学作家論』昭和十八年）では、江戸末期からの文芸の伝統を明治につないだという意味で魯文より評価すべきとある。これは、前の條野採菊にも当てはまる。二代目種彦こと高島藍泉門下・右田寅彦も饗庭と席を並べた新聞記者で名作家。篁村の「酒友」（坪内逍遙「篁村伝の補遺」）だったという。代表作は戯曲「紀伊国屋」・同「生島新五郎」。漢学の高谷龍海のもとでは、「蘇生の祝い」がある。これは、池上彦の面白い逸話としては、「蘇生の祝い」がある。これは、池上本門寺で生前に葬式を行い、そこで劇的に蘇り、それを祝ったという余興（鶯亭金升『明治のおもかげ』山王書房・昭和二十八年）。鈴木芋兵衛（鈴木彦之進）は「読売」の劇評家。榎本破笠は、櫻痴門下で『やまと新聞』の記者。劇作家として「名工柿右衛門」などを残す。この年は『虫眼鏡』・『美人の犯罪』とい

つた探偵小説のほか、俳人伝『秋色櫻』を著す。骨皮道人(西森武城)も記者であり、編集者。滑稽物をたくさん書いた文人。「やまと新聞」にも多く寄稿。明治二十六年は『滑稽教育談』・『教育修身談』・『作文指南』などを刊行している。片山友彦も『万朝報』などの記者。谷田部落葉については不詳。武田仰天子は大阪で主に活躍し「大阪風の言文一致」と評された(『当世作者評判記』)。書かれた読み物の多くが戯作調だが、その題名のつけ方に近代的なものがある。この年は『蝦夷錦』・『雪鳴深山鳥』など。岡本狂綺堂は言わずと知れた岡本綺堂。この頃はまだ目立った著作はないが、洒落ル会に連なる人物の中では至って若く二十歳を越えたぐらいであり、それ故に後年の活躍が約束されているかのようだ。綺堂も『やまと新聞』の記者であった。篤亭金升も『やまと新聞』の記者。この年『実録恋復刃』や『渡る雁が音』。自由人として終生貫いた。

続いて幹事。若菜貞爾は戯作者で胡蝶園若菜の筆名で知られ、この時期は『櫓太鼓音高砂』を著す。大澤基輔は、大沢緑蔭のことで、円朝の高座復活に尽力した一人として知られ昭和五十一年五月『講談研究』二百六十八号所収、天沼雄吉「今村次郎先生」(五十三)などにその人柄が記されている(田邊孝治氏御教示)。廣岡柳香は、彩霞園柳香であり、榛名山の農民騒動を描いた『筵旗群馬嘶』(明治十四年)などの著作。関根只好は、関根黙庵の名が有名で、講談落語研究の開拓者として今日に名を残す。この会の次の年・二十七年には『名人巳辰録』を上梓。江澤梅逸は、神田連雀町の青物問屋の主人で明治の通人として顔が利いたようだ(『明治のおもかげ』)。談洲楼燕枝とは、前に

書いたが柳亭燕枝と同一人物。資料的に二つの名が並ぶのが珍しい。山下晴雨も詳細不明だが、この筆名は北斎の黒富士で著名な「山下白雨」に拠ったものか。著作として『鶯谷お梅仇討』(明治十九年『諸芸新聞』)が確認できる他、浪廻家廬生『怪談大うなぎ』(明治二十二年)の題材は白雨が提供したとされる。最後に会主・伊東専三(橋塘)だが、魯文門下の戯作者で、石川巖によれば筆が辛辣で敵を多く作り、作家としても記者としても大成しなかったと冷評(『写実主義以前の小説』新潮社『日本文学講座』昭和六年)。しかし、この伊東が関与した著作物の数は膨大にのぼり、軽々に看過できない。作家としても、編集者としても多くの仕事に携わったことは確かである。一癖ある其の人柄とともに今後見直しが図られるべき人物であろう。この年は『島千鳥沖白浪』を編纂。これは前の燕枝の口演による。もつとも、どこまで燕枝の口演に忠実か定かではない。^{注3}

○

これらの人物を眺めると、幾つかの繋がりが見えてくる。そして、その綻びをたどって行けば、根岸派と『やまと新聞』の連中が、この会の中心となって動いていたのではないかという想像が自然に浮かんでくる。なぜなら、洒落判者に二人、賛成者に同じく二人の根岸派の文人がいて、『やまと新聞』の記者が賛成者のなかに四人もいるのである。

往時の根岸派の存在は硯友社に拮抗するものであった事は、当時を振り返る随筆・記録類でも容易に証明できる。後藤宙外

『明治文壇回顧録』によれば、実際は春陽堂編集部が『新小説』の実務を行っていたにもかかわらず、表向きだけは根岸派の文人達の編纂になっていたという逸話からも、その勢いは窮える。もつとも、その内実は、およそ権力的なものではなく、白石実三の「根岸派の人々」(改造社『日本文学講座』十一巻・昭和十年)では、内田魯庵の言葉として根岸派は「八笑人・七偏人の生活」とあり、朝から酒盛りだったとある。これには幾ばくかの誇張も有ろうが、本質をついた比喻であろう。柳田泉は『幸田露伴』(中央公論社・昭和十七年)のなかで根岸派の構成員を、篁村・思軒・得知・須藤南翠・宮崎太華・関根黙庵・宮崎三味・幸田露伴・久保田米儒・檜崎海運・中西梅花・富岡永洗・岡倉天心として、「無邪気な洒落を交換して嬉しがった」と記す。塩田賛の『幸田露伴』(上)(中央公論社・昭和四十年)でも。「な^{注4}かま同士のしゃれや自分たちだけの隠語を好んで用ひた」とある。露伴の「明治の文壇雑話」(新潮社『日本文学講座』十五巻・昭和三年)では、根岸派を回想して「人品も低く無かった」・「徹頭徹尾世の中を洒落のめして」とある。その他先人の諸々の証言をまとめると、洒落や座興に目が無く旅を愛し、酒に親しみ。浮世ばなれで主義主張に縁遠く、硯友社向こうを張ったかのよう^{注4}に言われもしたが、『国民之友』からの揶揄があったように、内幕は文芸主張を特にもたない集まりであった。露伴が後にこの気風を疎んじた事は、彼の手紙や、丹羽愛二が「露伴と根岸党」(露伴全集付録・岩波書店・昭和五十四年)で指摘した露伴の『当世外道の面』の「大道外道」が根岸派の戯画化という事からも分かる。槌田満文氏の「根岸派における幸田露伴」(平成

十年三月『武蔵野日本文学』七号)によれば、根岸派の結成は明治二十三年で、同三十年ごろに自然消滅したと考証。さらに、これによれば派の増員によって根岸派の名称は、後に「楽々会」となるが、その成立は明治二十六年頃とある。因みに、この会の機関誌『狂言綺語』の発行も、この明治二十六年三月で、その編集の任当たったのが幸田露伴だが、その後すぐ露伴は会を脱退。『狂言綺語』は第一号をもつて終刊となった。このように、根岸派の過度期にあったのが、明治二十六年という年であり。そんな時に「洒落ル会」は催されたのである。

ともかく、かかる根岸派と洒落ル会の方針が重ならないはずが無い。かたや、『やまと新聞』の記者連中の性質は洒落に對して、如何だったのであろうか。鶯亭金升『明治のおもかげ』のなか「駄ジャレ記者」に次のような事が記されている。

「やまと新聞」が京橋三十間堀にあった当時、編輯局で毎日洒落を飛ばしていた三面記者に、条野採菊、岡本綺堂、榎本破笠、長井金升の四人、別室には櫻痴居士(福地源一郎)が主筆としていつも苦い顔をして扣えている。(中略)。或時茶受けに喰べようと京鹿の子(隠元豆の鹿の子餅)を竹の皮に包んで塩結びの包と一所に持って行ったが、正午に弁当を喰べるとき、その握り飯を喰いながら鹿の子餅も喰いたくなり、右の手には握り飯を持ち、左の手には鹿の子餅を持って、代る代る喰べ始めた。隣の綺堂氏、これを見るや眼を円くして、「お結びと鹿の子を喰い分ける人は珍しいナ」と言ったので金升透かさず、「条野さん、京鹿の子むすび道成寺、とはどうで

す」と言ったら採菊翁、「あッハハハハハハ、いやな洒落だ」と笑った。

『やまと新聞』の連中も根岸派に負けぬ洒落好きが揃っていたのであった。おそらく、この会の肝いりも彼ら『やまと新聞』の連中だったのではないか。その上で、先輩であり多分その洒落の洗練さ穿ちの切れ味には一目置く根岸派に声をかけ、その年長者に洒落判者になつてもらつたのではあるまいか。ただ、最も洒落に長け、これを好み嗜んでいたのは、判者ではなく「賛成者」にまわつた根岸派の代表的人物・饗庭篁村だったことは、さまざまな証言からわかる。幸堂得知が明治二十四年三月『東京朝日新聞』に掲載した「貧工夫初夢曾我」に「竹の舎の隠居士ト遅いか年始だよとの触込にて入来り吉例の通りノベツ洒落のめされ我等大きにメンクラヒ」とある。また、坪内逍遙「篁村を悼む」（逍遙選集十二巻）にも「私の本郷の宅で、夜に入るまで飲んで大酔して、仕入れ物の六曲屏風に発句やら駄洒落やらを暗雲に書き散らし、泊れというふのをも聴かないで」。幸田露伴の「明治文壇雑話」には、旅先でも「何処までも洒落れてゐようと言つたやうな調子」と篁村の手柄を語り、さらに篁村が「一座の長老株」と回想したように、洒落に富んでいたことが、年齢の差を越えて根岸派の代表と目された理由でもある。ところで、具体的にこの会を発足させた切っ掛けが何か有るのであるうか。そのころの書物を顧みると、例えば、中村暢『滑稽演舌会』（明治二十二年）。題名から分かるがは演説会を引つ掛けたもので、おかしな噺をしてその出来具合を比べるとい

うもので、この中には洒落の競い合いもある。『おもしろし』（明治二十三年）所収「滑稽大演舌会」は世話人を十返舎一九に、会場係を式亭三馬に、会主を曾呂利新左衛門に据えて、滑稽な話を競い合う趣向。その他、この時期に土子武史郎『洒落哲学』（明治二十年）、伊東洋二郎『説教洒落袋』（明治二十五年）、加藤福太郎『洒落指南所』（同年）、『洒落文庫』（明治三十年）など、洒落に関する本が出版されている。もつと根岸派に近づけた資料引いておこう。それは幸堂得知が、明治二十三年に著した『駄洒落揃い』なる滑稽小説である。冒頭を引用する。

慶長三年三月十五日桃山御殿の洒落会は用意万端調ひいよ／＼本日開会の式を挙るまでに運びしが、開会に先立ち三ヶ津の愚士三人を会場に呼入れ委員曾呂利新左衛門仮に議長の席に座を占め「扱て三ヶ津の博士達よ、今日我君にも日本六十餘州の洒落馬鹿士を召れ臍に宿替へさする程の名洒落をお聞遊ばれさんとの思召にて……」

ここに既に「洒落会」という言葉が出てくる。この後の話柄は、助役の副議長の座を巡って洒落の力が試される。江戸・大坂・京都の三人には「鶯の声」という題をだされるが、我先にと他を押しつけて自分の洒落をとばすので、世話人の曾呂利では決めかね、全国の洒落家の意見を求めようとする。そこへ、ある出入りの町人が出てきて身の上話をして、三人が兄弟であることを聴かされる。すると、最もこれまで親の愛情に恵まれなかつた兄弟の一人が、この任を他の兄弟から譲られる。議長は太

閣秀吉で開会されるが、あまりいい洒落が出なかった、という筋。ここで終わり、全国の洒落家が競い合う場面はない。これは当時の国会模様を風刺したものだという見方もあるが、果たしてそれほど真剣な仕掛けや風刺になっているか疑問である。

尚、三人の洒落家が居並ぶ道具立ては飄蕪散人『瀟灑三博士』（盛陽堂・明治三十九年）にも表れる。一休・曾呂利・蜀山人（大田南畝）が其の三人。

これだけ見れば「洒落会」なる名称と、その趣向は判者・幸堂得知に拠るところが少なくなかったのかもしれない。

根岸派や『やまと新聞』の連中は、本来全く虚構の産物だったものを、明治二十六年十一月入谷の鬼子母神で現実世界に成立させてしまったのである。前引、金升の日記『むだ雅記』の明治二十六年十一月十二日には、こうある。題の下に記した洒落は、おそらく金升自作のものであろう。

十二日午後入谷の洒落会へゆく 当日急作の語呂

題しやれの内のお祖師様 荒れの後のお星様 酒の後の今年
蕎麦 題どうで有馬の水天宮京で秋なら通天橋 題恐れ入谷
の鬼子母神 押れ廓の市のばん

台東区入谷鬼子母神にはこの時の秀逸作が額に収められ現存するそうだ（非公開）。

注1 根岸派よりも従来は根岸党の呼称の方が一般的であったことについては、岡保生「根岸派雑感」（明治文学全集・月報九十八）に、党

から派になるまでの考証あり。尚、稲垣達郎が「根岸派文学」（筑摩書房『稲垣達郎学芸文集（二）一九八二』で指摘したが「根岸派」なる名称の早い例は、明治二十四年十月二十日『早稲田文学』の「根岸派」とある。植田満文「根岸派における露伴」（前掲）では、根岸党のなかでも文学者を「派」と区分したとする。

注2 「洒落会」の前年・明治二十五年に條野採菊は「百物語」の会を催している（山本笑月『明治世相百話』）。この成果は明治二十七年に町田宋七・編『百物語』（挿絵・水野年方）に結実。ここには「洒落ル会」と面子を同じくするのが、條野採菊・談洲樓燕枝・幸堂得知・南新二に加えて、この『百物語』の「序」を骨皮道人が書いているので、合計五人いる。なお、小泉八雲「因果話」の原話である松林伯円の話が第十四席に収まっている。また、新聞懇談会も明治二十五年十一月二日に開かれており（土谷桃子氏「条野伝平（山々亭有人・採菊散人）年譜考証」・お茶の水女子大学国語国文学会『国文』平成四年八月）。この発起人が採菊と寺家村逸雅。この洒落ル会も有能な仕切役でもあったか。

注3 左文『私の見た明治文壇』には、その頃の戯作者は落語家や講談師より収入が少なかった、とある。他人の財布の中身まで干渉しあえるほど、芸人たちと文人は近い存在だったということがこれからも分かる。

注4 神山彰氏「素人」時代の戦術―劇評家・饗庭篁村と三木竹二―（平成十二年・五『日本近代文学』六十二集）では、篁村が符牒などを駆使することなく、素人の立場から劇評したことが成功につながったと指摘する。これは、隠語を専らとした根岸派の文人としては矛盾するかなのような文筆姿勢だが、文学者の在り方の二面性を考える上で示威に富んでる。

注5 洒落づくりや口上茶番が根岸派を中心に積極的に行われたことは、篠田鉞造『明治百話』からもわかる。

「諸君洒落ル会」は吉沢英明氏の御所蔵。本稿作成に当たって借覧させて頂いた。尚、同じ刷物を真源寺も所蔵（下谷観光連盟発行『したや』第二巻・昭和54・3）。

（なかがみ しげあき・博士課程三年）